資料紹介 Data

「八橋前方後円墳」採集須恵器について

東方仁史 [1]

A Study on Sue-ware, collected from the“Yabase-Zenpoukouenhun”

Hitoshi HIGASHIKATA[1]

はじめに

本稿で紹介する須恵器は、「八橋前方後円墳」採集として当館に所蔵される須恵器である。これまで図化や展示が行われなかったせいもあり、その存在はほとんど知られていない。検討の結果、採集古墳は旧八橋郡内で最大規模を誇る、全長 62 m の大型前方後円墳「八橋狐塚古墳」以外に考えにくいと判断した。同古墳については、西くびれ部にある小石室が紹介されている以外に、これまで明確な時期が明らかにされていなかった。本稿では採集品ではあるが八橋狐塚古墳から出土したと考えられる須恵器を紹介し、時期や位置づけについても若干の検討を試みる。

1　採集須恵器の概要

「八橋前方後円墳」採集須恵器はいずれも破片となっているが、形状が分かる程度に残存する器種も存在する。高杯 2 点、𤮈 1 点、甕破片 14 点である（図 1）。甕は焼成や胎土から、基本的に同一個体と考えられる。

（1）高杯

1 は有蓋高杯の杯部から脚部にかけて比較的良好に残存するもので、全体の残存高は 11.5 cm をはかる。杯部は口縁部を欠損するが受部から底部に欠けて 4 分の 1 程度が残存する。杯部は受部径 17.2 cm、口径は 15 cm 程度となろうか。やや扁平な形状である。底部は回転ケズリが施されるが、脚部の製作に伴うナデで消されている。

脚部は 3 方向に穿たれる 2 段透かしの間約 3 分の 1 が、下段透かしの半分程度まで残る。杯部との接合部で直径 5.2 cm をはかる。透かしは上下がヘラ切りではなく、整形されていないことから、側面を切り取った際にちぎりとったようである。

透かし間には凹線が 2 条巡らされるが、あまりシャープではない。内面は杯部との接合部付近はナデ、それより下方は粘土を絞ったあとが残っている。胎土は比較的緻密で灰色を呈し、焼成は堅緻である。

2 は高杯の脚部である。両端は透かしで切り取られており、残存高は 5.8 cm である。内面の上端には粘土を絞った痕が若干残るが、それより下方と外面はナデで仕上げられる。胎土は比較的緻密で灰色を呈し、焼成は堅緻である。なお、本個体は 1 と同一個体の可能性がある。

（2）𤮈

3 は𤮈である。底部を欠くが、胴部上半のみ完存し、頸部も 2 分の 1 程度残存する。口縁部は欠損する。

胴部径 8.6 cm、残存高 10.2 cm をはかる。胴部はやや扁平な形状で、中央部に直径 1.4 cm 程度の孔が斜め上方から穿たれる。孔の上下の位置に凹線が 1 条ずつ巡らされ、凹線間には櫛状工具により列点文が施される。胴部下半はケズリが施される。肩部内面には絞った痕跡が若干残るが、頸部の製作時のナデで消されている。頸部～口縁部の途中に凹線が 2 条巡らされ、それより上方には櫛状工具による波状文が施されていたようだが、残存状況が悪くほとんど確認できない。

胎土は緻密で表面は灰色を呈するが、断面は褐灰色を呈し、やや赤みがかっている特徴がある。

（3）甕

4 は甕の口縁部、頸部～肩部の破片から復元したもので、口径 31.0 cm、口縁部高は 8cm 以上に復元できる。口縁部はやや外反し、端部は折り返して肥厚させる。肩部は外面平行タタキの後ナデ、内面は同心円当て具痕が残る。胴部以下は部位が特定できないため図化していないが、外面に平行タタキ、内面に同心円当て具痕が残る。比較的大型の破片が多いが、破片同士はまったく接合しない点が注意される。

[1] 鳥取県立博物館　〒 680-0011 鳥取市東町 2-124
Tottori Prefectural Museum, Higashi-machi 2-124, Tottori, 680-0011 Japan
E-mail: higashikata-hi@pref.tottori.jp
［受領 Received 23 November 2013 ／受理 Accepted 31 January 2014］

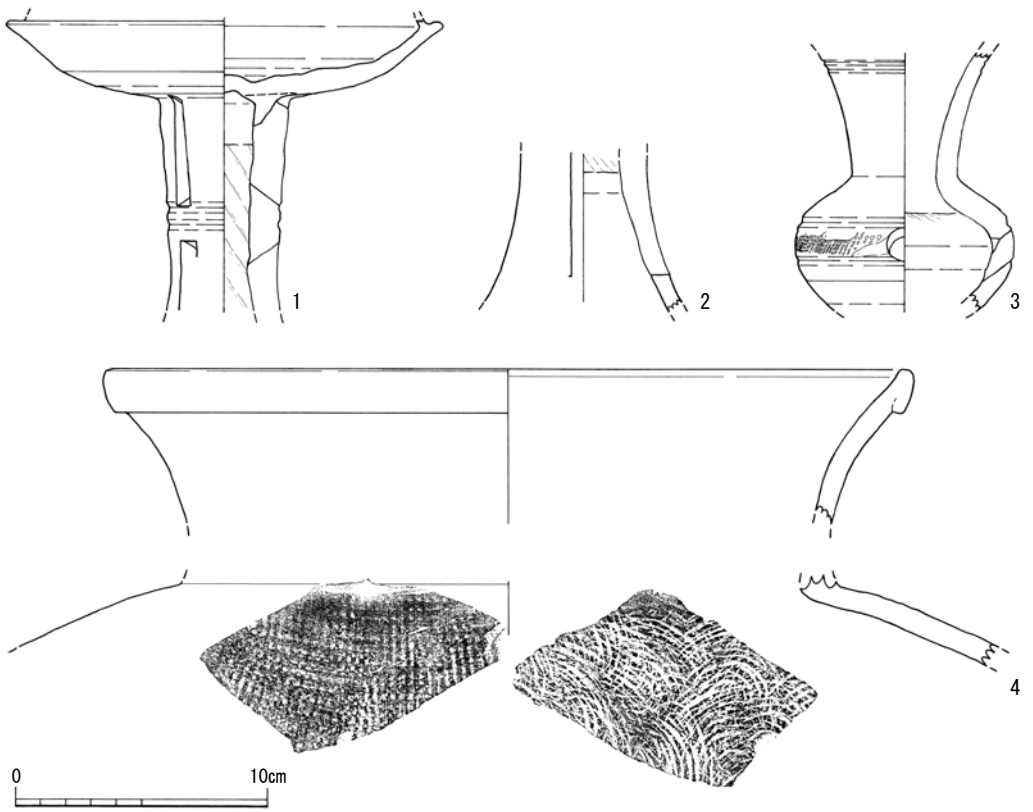


図１ 「八橋前方後円墳」採集資料実測図

２ 須恵器の年代的位置づけ

これらの須恵器の時期について検討する。高杯は受部をもつ有蓋高杯で、脚部は復元すると比較的長く、2 段透かしを 3 方向に穿つ。口縁部端部は残らないが、全体的に大型で杯部がやや扁平であることが特徴と言えよう。𤮈は胴部が小型である一方、頸部以上は比較的大きく開く形状である。甕は、頸部から外反し端部外面を厚くする。

以上のような須恵器の特徴は、東伯耆の古墳時代土器編年（小口ほか 2004）では八橋Ⅵ期に該当する。周辺では出雲の須恵器編年（大谷 1994）で出雲Ⅲ期、全国的には陶邑編年（田辺 1981）で TK43 型式に該当し、比較的まとまった年代観を与えうる。古墳時代後期後葉、実年代では 6 世紀後葉という時期に位置づけられる。個体数は少ないものの、まとまって採集された資料であることがうかがえる。

３ 「八橋前方後円墳」の検討

（1）出土古墳の推定

これらの須恵器は、台帳によれば当館の開館直前、昭和 47 年 7 月 21 日付で寄贈を受けたものである。寄贈者は東伯郡赤碕町（現琴浦町）在住の三浦宗雄氏（故人）で、同時に他に 19 件の資料を寄贈されている。旧赤碕町域を中心とする地元の遺跡採集品が多い。また、登録資料以外にも、未登録資料として数件の資料が保管されている。

須恵器が採集された古墳については、高杯、𤮈、甕それぞれに「八橋前方後円墳」という注記があるのみで、そのほか、採集された日付として、「昭三一. 三. 一三」という注記がある。これらからだけでは採集された古墳がどこなのか、明らかではない。

「八橋」という地名は指し示す範囲が時期によって異なる。最も広い範囲は江戸時代までの「八橋郡」で、現在の琴浦町と北栄町の旧大栄町部分、大山町の旧中山町の東半分を合わせた範囲となり、仮に八橋郡とすると所在する前方後円墳は 7 基程度となる。しかし、同郡は明治 29 年に河村、久米郡と合併し東伯郡となっていることから、昭和 31 年の時点でこの八橋郡を使うことは考えにくい。より狭い範囲としては「大字八橋」があるが、これは JR 八橋駅が位置する琴浦町のおおむね中央に当たる地域である。旧東伯町域では最西端に位置し、日本海に流入する八橋川の流域とほぼ重なり、すぐ西側は寄贈者が居住した旧赤碕町域になる。これまでに、大字八橋において確認されている前方後円墳は、八橋狐塚古墳しか存在しない。

また、当館の未登録保管資料の中に、「八橋スワ神

図２　八橋狐塚古墳周辺航空写真（1968 年撮影）

図３　八橋狐塚古墳周辺分布図（国土地理院発行２万５千分の１地形図〔赤碕〕を使用）
1　八橋狐塚古墳　2　笠取塚古墳　3　別所古墳群　4　福留古墳群　5　出上岩屋古墳
6　光古墳群　7　箆津古墳群　8　坂ノ上古墳群　9　金屋古墳群　A　諏訪神社　B　赤碕港

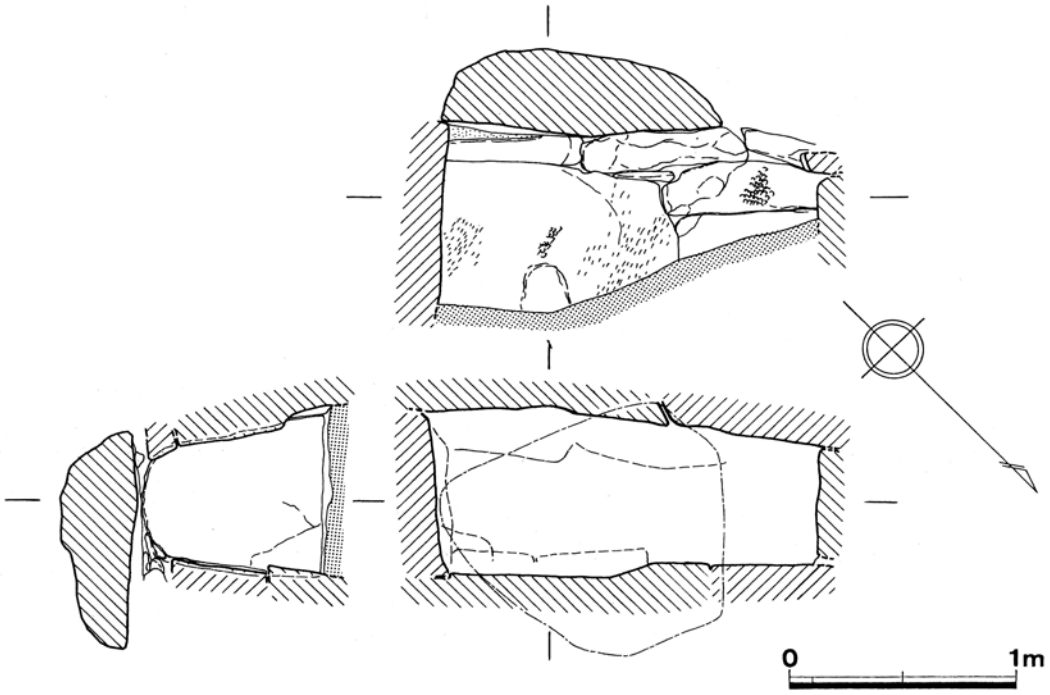


図 4　八橋狐塚古墳くびれ部石室実測図（牧本 1999）

社南前方後円墳　S 三一 . 三 . 一三」という注記がある磨石があるのを見出した。須恵器と採集日が同じでかつ筆跡もほぼ同一であり、同時に採集されたものと推定される。この「スワ神社」は琴浦町八橋に鎮座する諏訪神社と考えられ、八橋狐塚古墳はこの諏訪神社の真南ではないが南西に位置する。こうした点を考えると、この「八橋前方後円墳」は八橋狐塚古墳以外には考えにくい。

以上の検討のように、本稿で紹介した須恵器は、八橋狐塚古墳で採集されたことはほぼ間違いないと考える。

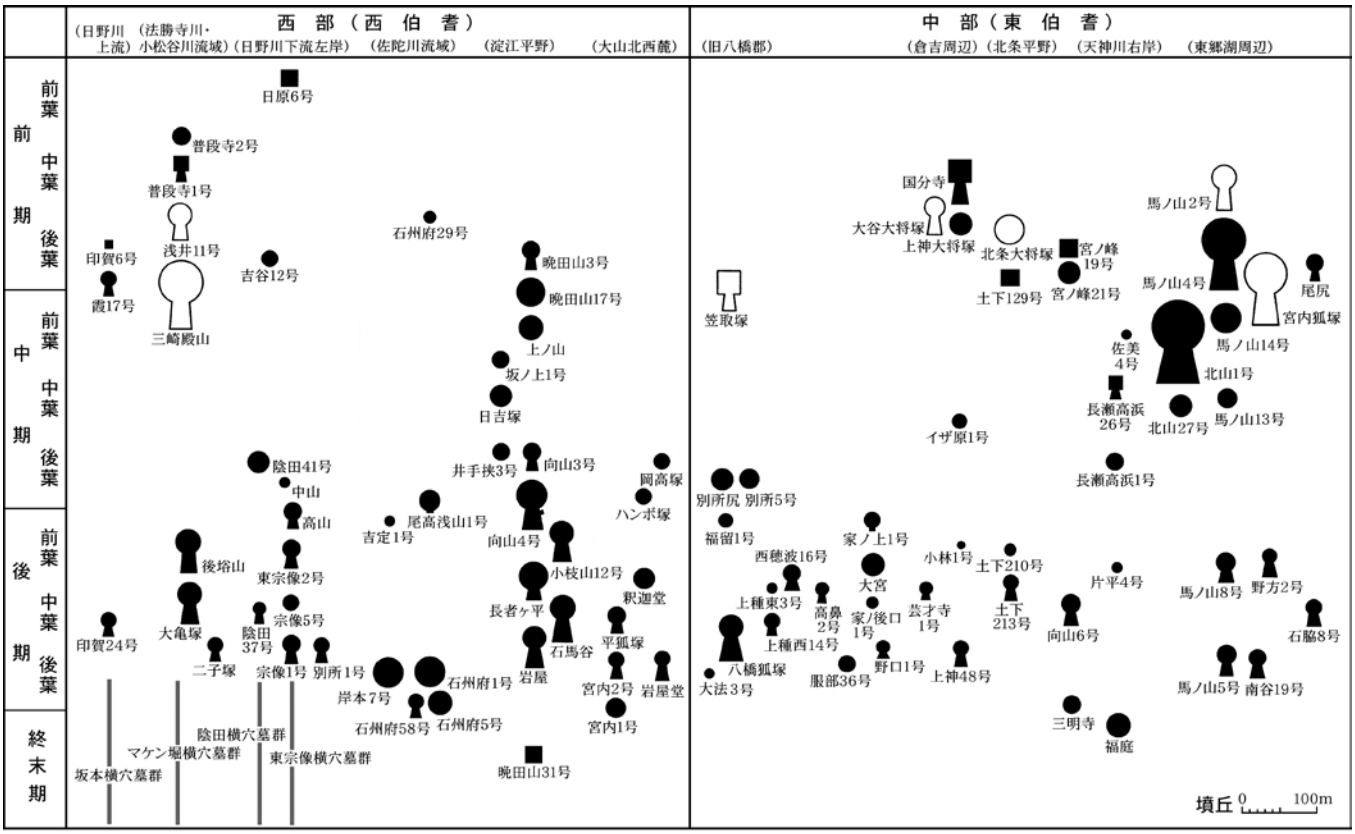
（2）八橋狐塚古墳の検討

八橋狐塚古墳は全長 62 m の前方後円墳で、北北東に前方部を向ける。大山山麓が河川によって開析されて残った台地状の丘陵上に位置しており、丘陵が北北東に伸びるため、前方部を海に向けていることになる。大正時代からその存在は知られていたが（鳥取縣 1924）、古墳自体の調査はほとんど進んでいない。かつては中期（野田・清水 1983）や中期後半に位置づける（近藤ほか編 1991）見解もあったが、後述の旧東伯町教育委員会による試掘調査結果や西くびれ部に開口する小石室の検討などから、古墳時代後期の築造と想定されてきた（君嶋 2005）。

古墳周辺は旧東伯町教育委員会により試掘調査が行われており、周濠の存在が確認され、須恵器片が出土している（東伯町教育委員会 1991）。また、古墳の周囲には航空写真によりかつては方形区画状の痕跡が認められていた（図 2）が、周辺が整備され判然としなくなっている。狐塚古墳の北西 500 m には、直径 30 m を超える大型円墳別所 5 号墳、別所尻古墳を中心とする別所古墳群、更にその西側には時期不明の前方後方墳笠取塚古墳（別所 1 号墳、53 m）が存在する（図 3）。別所古墳群は眼下に日本海が迫る丘陵突端に築造されており、海を意識した古墳である。狐塚古墳は海岸から 300 m ほど内陸ではあるものの、丘陵の先端近くであり、墳丘上からは日本海が広く見渡せる。別所古墳群と同様に海、あるいは海からの視線が意識されている。

前述のとおり、八橋狐塚古墳では西くびれ部に小石室が存在する（図 4）。この小石室は、現状でくびれ部頂平坦面に開口しており、天井石が露出する。玄室長 1.7 m、幅 0.7 m で北西方向に羨道がつき開口するとみられる。床面や玄門部より外の構造は未確認であるが、東伯郡西部に分布する竪穴系横口式石室の範疇で考えられている（牧本 1999）。この小石室の開口時期は明らかではないが、大正時代の報告には記述がないため、それ以降、本古墳の石室に関する記述が登場する昭和 34 年までには開口したのだろう（佐々木古代文化研究室 1959）。

この小石室は小規模で位置もくびれ部頂上であることから、中心埋葬ではないと考えられる。しかし、仮に中心埋葬が横穴式石室であれば、追葬を前提とした



※白ヌキは時期比定の根拠が薄いもの。

図5　伯耆主要古墳編年

その石室とは別に横穴式石室を築造したことになる。中心埋葬が横穴系でなかった可能性、あるいは何らかの理由で別に埋葬施設を構築した可能性も考えなければならない。中心埋葬については今後の調査に期待するとして、少なくとも幾度かにわたり埋葬が行われた事が想定でき、本稿で紹介した須恵器もそのいずれかに伴うものとなるので、古墳築造も TK43 型式を下限とする時期に比定できよう。

（3）古墳時代後期後半期における伯耆

八橋狐塚古墳の全長 62 m という墳丘規模は、伯耆において米子市淀江町石馬谷古墳（TK10、61 m）と並び、古墳時代後半期として最大規模を誇る。米子市淀江町周辺には古墳時代中期末から後期にかけて、大型の前方後円墳が連綿と築造され、伯耆における最上位の首長が葬られたと考えられる。これと同時期に、同程度の勢力が東伯耆にも存在した可能性が出てきた（図 5）。

淀江地域は平野が広がるとともにかつては潟湖が存在し港湾として機能したと考えられている。生産基盤の存在とともに、交通の要衝でもある立地は、比較的古墳群築造の背景を考えやすい。一方、八橋狐塚古墳周辺は大山の山裾が急に海に落ち込む先端の立地で、可耕地は丘陵上の平坦地か丘陵間の小河川沿いの平地ぐらいしか存在しない。伯耆最大規模の古墳を築くことができるような、生産基盤は見当たらないのである。

ところで、琴浦町～大山町にかけての大山山麓においては、海を見下ろす丘陵上に築かれた古墳（群）がいくつか存在している（図 6）。前述の別所古墳群のほかにも、篦津（のつ）古墳群（琴浦町）、御崎古墳群（大山町）、豊成（とよしげ）古墳群（同）、名和公園裏古墳群（同）などは、海岸線から 300 m 以内の所に位置する。多くは海岸に面した丘陵上に位置し、古墳からは海が広く見渡せるとともに海上からの視認性も高い。さらに、古墳群の近くには、小規模ながら現在も港が存在するところが多い点は注目される。古墳時代までその存在が遡るかはともかく、港として使用されるのに適した地形であり、より小規模でも港として機能した古墳時代にも利用された可能性は十分考えうる。また、港が存在しない所でも近くに港として機能しそうな入り江は存在しており、同様に港の存在を想定できる。これら海岸に築かれた古墳群は、基本的に小規模な円墳で構成されており、大きな勢力とは考えにくい。港となる入り江を拠点に海上交通に関わった、あるいは海を生業の一部とした、小集団の墓域であった可能性が高い。

その中において、全長 62 m と後期における伯耆最大規模の八橋狐塚古墳は特異な存在である。前述の淀江平野周辺に存在する前方後円墳は 60 ～ 50 m 前後であり、八橋狐塚古墳と同格かそれよりも下位に位置づ

図６　大山山麓における「海の古墳」（国土地理院発行２万５千分の１地形図〔赤碕〕〔御来屋〕を使用）
１　八橋狐塚古墳　２　笠取塚古墳　３　別所古墳群　４　篦津古墳群　５　御崎古墳群
６　豊成古墳群　７　名和公園裏古墳群

けられる。東伯耆には他に並び立つ存在はなく、古墳時代後期において、八橋狐塚古墳に埋葬されたのは伯耆を代表する人物だったことが想定できる。

おわりに

本稿では、推定資料ではあるが、八橋狐塚古墳を須恵器から検討した。本稿でのべたとおり、同古墳は古墳時代後期後半の築造と考えられ、同時期としては伯耆最大規模である。中心埋葬の情報が分からない現状ではこれ以上の検討は難しいが、やはり、海との関わりを無視することはできない。他地域の状況や周辺の遺跡や古墳の状況を踏まえ、改めて検討してみたい。

参考文献

大谷晃二 1994「出雲地域の須恵器の編年と地域色」『島根考古学会誌』第 11 集
小口英一郎・北島大介・原あづさ 2004「第 1 節　八橋第 8･9 遺跡における 6 ～ 7 世紀の土器編年」『八橋第 8･9 遺跡』鳥取県教育文化財団調査報告書 87
君嶋俊行 2005「因幡・伯耆における首長墳の消長」『前半期の首長墳の消長』第 10 回中国・四国前方後円墳研究会
近藤義郎ほか編 1991『前方後円墳集成』中四国編
佐々木古代文化研究室 1959「鳥取県前方後円墳地名表 (2)」『ひすい』67
田辺昭三 1981『須恵器大成』
東伯町教育委員会 1991『東伯町内遺跡発掘調査報告書』東伯町文化財発掘調査報告書第 22 集
鳥取縣 1924『因伯二国に於ける古墳の調査』鳥取縣史蹟勝地調査報告書第２冊
野田久男・清水真一 1983『日本の古代遺跡９　鳥取』
牧本哲雄 1999「地域型横穴式石室とその背景」『地域に根ざして』田中義昭先生退官記念文集